

感情制御困難を生み出す日本特有の親子関係

— 日米の差異を探索する調査を通して —

大河原 美以*・響 江吏子**

(2012年11月26日受理)

OKAWARA, M. and HIBIKI, E. ; Japanese Characteristic Parents-Child Relationship Which Produces the Difficulty of Emotional Regulation: *Through an Exploratory Research about Difference between USA and Japan.* ISSN 1349-9580

It has been discussed in the author's prior clinical research that invalidating environment that parents deny their child(ren)'s negative emotion and somatic sensation produce the difficulty of the sound development about emotional regulation. The purpose of this paper is to research the difference between USA and Japan about the invalidating environment that parents deny their child (ren)'s negative emotion and somatic sensation and to discuss about the cultural difference of parents-child relationship between both countries based on the result. Investigation by some questionnaires was made for infant's mothers in parks of USA and Japan. Finally it suggests that many Japanese mothers have double-bind communications which control child's negative emotional expression by compliment. The result leads to the possibility that bilateral characteristic in childhood "a good child in front of parents/a tantrum child in school" is caused from Japanese characteristic parents-child relationship.

KEY WORDS : Invalidating Environment, Parents-Child Relationship, Negative Emotion, Emotional Regulation, Cultural difference

* *Department of Educational Psychology, Tokyo Gakugei University*

** *Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*

1. はじめに

1-1. 感情制御の発達不全モデル

筆者は、日本の子どもたちの心理的問題の治療援助を行ってきた経験^{22) 23)}から、感情制御に困難を抱える状態が形成されるプロセスを「感情制御の発達不全モデル」として示し、治療援助方法を明らかにしてきた^{24) 25) 26) 27)}。

「感情制御の発達不全モデル^{24) 25) 26)}」とは、親が子のネガティブ感情(負情動)や身体感覚を否定することによって、子が愛されるためには、自身のネガティブ感情や身体感覚を感じないことにする必然性が生じ、解離

反応によって制御されたネガティブ感情は過覚醒反応に反転することによって、暴走し、著しく感情コントロールできない状態に陥るといふ仮説である。過覚醒症状に対する相互作用における悪循環により、次の2つのタイプの育ちが導かれることを示している。幼児期・児童期には、過覚醒反応と解離反応が交互に出現する形で、「親の前でよい子/保育園・学校でできる子」の姿を呈するタイプと、幼児期・児童期には(一次)解離反応優位でいわゆる「よい子」だが青年期になってから心理的問題を呈しはじめるタイプである。ネガティブ感情制御の困難は、暴力や攻撃性の暴走、いじめ、不安の身体化とし

* 東京学芸大学総合教育科学系教育心理学講座

** 東京学芸大学大学院教育学研究科

での心身症、不登校、自殺企図やリストカットなどの自傷行為を生じさせ、さまざまな子どもの心理的問題の源になる²⁵⁾。児童期に親子関係が軌道修正されないと、青年期以降には複雑性PTSDと言われる状態を呈し、深刻で多彩な症状を抱えることになる。そのような状態で何年も「ひきこもり」状態に陥ることも多い。

1-2. 「発達性トラウマ障害³⁹⁾」と環境の機能不全

Van der Kolk, B. A.³⁹⁾ は、いわゆる身体的・性的虐待だけでなく、ネグレクトや心理的虐待、親の死や別離の喪失などを契機とするさまざまな日常的なトラウマによって、感情制御に著しい困難を示し、複雑性トラウマを抱えながら成長する状態に対して「発達性トラウマ障害 (Developmental Trauma Disorder)」という診断基準を作ることを提唱している。トラウマ的な引き金に対して、引き起こされる感情調節の障害の反復 (B) と、不信感や被害感などの歪んだ認知などに関する症状 (C)、その原因となる要因 (A) として、客観的に深刻な生死にかかわるトラウマ体験だけではなく、「主観的な体験 (激怒、裏切られ感、恐怖、服従、打ちのめされ、恥)」を明示した。さらに教育・家族・仲間などにおける機能不全 (D) をその必要条件として明記したところに特徴がある。つまり、育ちの環境における機能不全があれば、主観的な経験であっても十分なトラウマ体験となり、ゆがんだ認知に基づく感情調節の著しい困難が生じるということを診断として体系化しようとしているのである。

筆者は、現在のDSM-IV (アメリカ精神医学会による精神障害の診断と統計の手引き) では、幼児期・児童期の日本の子どもたちの感情制御困難の状況を説明しきれないこと、すべての問題を発達障害の枠組みで理解しようとする近年の流行が、問題解決にはつながらないことを切実に感じてきた²⁹⁾ が、「発達性トラウマ障害」という診断枠組みは、日本の子どもたちの現状を説明することも可能にする。筆者の感情制御の発達不全モデル^{24) 25) 26)} は、Van der Kolk, B. A.³⁹⁾ の「発達性トラウマ障害」のD基準である環境の「機能不全」における悪循環のプロセスを具体化したモデルであるといえる。

児童期にきれるという形で著しい感情制御の困難を示す日本の事例においては、養育環境には正反対の2つのパターンがある。虐待やネグレクトなどの不適切な養育環境と、年齢不相応な「よい子」を求める家庭環境である^{22) 23)}。表面的には一見正反対の養育環境であるが、そこに共通しているのは、親が子の負情動・身体感覚を否定する関わりである。

1-3. 負情動・身体感覚否定に関する研究

親が子の負情動・身体感覚を否定する関係性について、Linehan, M. M.¹⁹⁾ は「不認証環境 (invalidating environment)」という言葉を用いて、境界性パーソナリティ障害の感情調節困難の背景にある家庭環境を説明し、またその弁証法的行動療法において情動を認証することを重要視している。invalidating environmentのキーワードで論文を検索すると、境界性人格障害のほかに摂食障害と自傷行為に関する論文^{12) 20) 35)} がみつかる。この概念は米国では、青年期の感情調節困難に基づく症状の背景にある育ちの要因を説明する概念として用いられているようだ。

筆者の「感情制御の発達不全モデル^{24) 25) 26)}」は、幼児期・児童期の問題をサインととらえて軌道修正が行われなければ、青年期に深刻な問題につながるというプロセスを明らかにしたモデルである。そこで筆者らは、母からの負情動・身体感覚否定経験を測定する質問紙を作成し³⁰⁾、解離傾向と自傷行為¹³⁾、および家庭内暴力との関係¹⁰⁾を検証し、母から負情動・身体感覚を否定される経験は、青年期の問題に影響を与えていることをこれまでに実証してきた。この結果は、Linehan, M. M.¹⁹⁾ の主張と一致している。

また、Linehan, M. M.¹⁹⁾ は不認証家庭として、親自身の問題により子どもに関与できない状態にある「混沌とした家庭」、なんらかの理由で子どものネガティブな感情の提示をがまんできない「完全な家庭」、情動を認知的にコントロールすることを重視する「典型的な家庭」の3タイプを示している。この3分類は、日本においてもあてはまると考えられる。筆者の分類^{21) 22)} による「虐待やネグレクトなどの不適切な養育環境」は「混沌とした家庭」に、「年齢不相応な『よい子』を求める家庭環境」は「完全な家庭」と「典型的な家庭」を含むものである。筆者は、情動を認知的にコントロールすることが、脳の情報処理プロセスにおけるダブルバインド²⁾を生み、感情制御の困難をもたらすメカニズムについてこれまで説明してきた^{24) 26) 28)}。

このように、負情動・身体感覚否定経験 (不認証環境) が、感情制御を困難にする環境要因であるという点は一致しているが、筆者の研究は、幼児期・児童期に二面性を示す形での感情制御困難を示す日本の子どもの治療援助経験^{22) 23)} から生まれてきた仮説である。米国における青年・成人の境界性パーソナリティ障害における治療仮説との一致は、きわめて興味深い。なぜ、そのような差異が生じているのだろうか？

欧米の研究において、幼児・児童の不快感情の表出に対する親の関わりが子どもの感情制御の力に影響を与

えるという実証研究は多く^{4) 6) 9) 15) 34)}, Eisenberg, N. & Fabes, R. A.⁹⁾ や Davidov, M. & Grusec, J. E.⁶⁾ は、子どもの感情表出を罰したり、不快感情を過少評価したり、子どもの感情表出にうろたえたりすると、子どもが不快感情を適切に扱えない状態になることを示している。また Cole, P. M.⁵⁾ は、虐待などの不適切な養育環境に加え、親がうつ状態などメンタルヘルスが悪い場合には、親が子の感情を適切にガイドできないため、感情制御困難に陥ることを指摘している。Gomez, A. M.¹¹⁾ は、5歳の痛癢がとまらない少女の事例において、子どもが泣くと母自身の幼少期のトラウマ記憶が喚起されて、適切に子どもの負情動に対応できないために、悪循環になり、子どもの感情制御が困難になっていた事例を報告している。これらの記述は、日本の事例にもあてはまるものであるが、「親の前でよい子/学校でできる子」という二面性を特徴とする感情制御困難に関する欧米の事例報告を、筆者は見つけることができていない。

筆者は、2011年4月～9月の半年間、サバティカルにより米国で生活する機会を得た。デイケアセンター（保育園）の観察などを通して、文化差が子育てに与える意味を実感として体験した。米国のセラピストとの交流からわかったことは、「親の前でよい子/学校でできる子」というあり方は日本特有のものであるらしいということであった。米国のほとんどの子どもは、家でも学校でも表出行動に差はなく、学校で感情コントロールできない子は家でも同じであるという。まれに、学校ではいい子だが家では困った子という姿はみられるが、その逆は見たことがないと聞いた。日本では、子どもを泣かせたくない場合、「(あなたは) 痛くない/恐くない/悲しくない」と親が子の身体感覚を直接否定する形をとることが多いが、米国ではそのような言いかたはされず「痛いよね/恐いのね/悲しいよね。でも強くなくちゃだめ。赤ちゃんみたいに泣かないでちょうだい」という不認証の形をとることが多いということであった。このコミュニケーションの差異は、後述する文化の差の反映であるといえる。

米国では、自己主張できる子が「よい子」であり^{1) 38)}、日本における過剰感情制御による従順な「よい子」²⁸⁾ は「よい子」ではない。親が子どもに何を求め、何を評価するのかという点は、文化の影響を大きく受けており、親が子に求める「よい子」の基準は文化によって異なるといえる。ゆえに、何を「不認証」するのかということには、文化差が反映されており、それによって表出する問題も異なると言えるだろう。

子の親に対する「家庭内暴力」¹⁴⁾ や「ひきこもり」⁴⁰⁾ は、日本特有の現象であるとすでに言われてきた。また岡野³²⁾ は、欧米における解離性障害の成因は、性的虐

待・身体的虐待とされているが、日本の症例においては、日本特有の親子関係における関係性のストレスがその成因として重要な役割を果たしていることを指摘している。幼児・小学生の「親の前でよい子/保育園・学校でできる」という近年の不応の典型的な姿もまた、日本特有の親子関係に起因する状態像なのではないだろうか？

1-4. 本論の目的

本論の目的は、親が子どもの負情動・身体感覚を否定するという関わりにおいて、日米にどのような差異があるのかを探索的に調査し、その結果をふまえて、日米の親子関係の文化差について考察を行う。それを通して、日本の子どもの感情制御の発達における困難の本質を明らかにする。

2. 個と集団の関係性における日米の文化差

2-1. 伝統的な日本文化論と親子関係

はじめに、調査結果を解釈するための前提となる日米の文化差について明らかにしておく。本来の日本人像をとらえるために、伝統的な日本人論を再検討する。

Benedict, R.³⁾ による日本人論「菊と刀 (1946)³⁾」によると、日本人は米国人と比べると、かなり特権的な幼児時代を過ごすこと、しかし同時に、自分の行動を観察するように徹底的にしつけられるということを日本の特徴として記している。この「観察する自己」は、日本人の行動規範である「恥」を生み、「観察する自己」から自由になるために、日本人は鍛錬を積むと考察している。

中根²¹⁾ は「タテ社会の人間関係 (1967)²¹⁾」において、日本人は他人に対して自己を位置づける際に、個人の資格よりも場を優先するという集団認識をもっているとし、その背景には伝統的・普遍的な「イエ(家)」概念があることを示した。そして大企業のような社会集団も終身雇用制度のもと、きわめて家族的な特色をもち、その中での年功序列に代表されるようなタテ組織の人間関係が社会にもつ意味を明らかにした。そして日本社会の「単一性」こそが、「人と人、人と集団、集団と集団の関係設定の在り方を決定」しているとし、日本の社会構造を明らかにした。

土居⁷⁾ は「甘えの構造 (1971)⁷⁾」において、幼児が母に甘える行動様式を「甘え」という言葉で表現することが日本独自のものであることから『甘え』という言葉をもたない民族に比較し、甘えを自覚する日本人の場合は、この心理が人間の精神生活のあらゆる面に強い影響を与えること」を指摘し、社会構造の中における「甘え」概念を日本文化の特徴として明らかにした。

河合¹⁶⁾はその著書「母性社会日本の病理 (1976)¹⁶⁾」の中で、包含する機能としての母性原理と切断する機能としての父性原理という視点から、日本社会が母性的な側面を優勢とする社会であること、そのことが日本の青年の自我の確立や精神病理に深い影響を与えてきたことを示してきた。また、稲村¹⁴⁾は1980年に、子が親に暴力をふるう家庭内暴力は日本特有の問題であることを指摘し、幼児期の過保護と学童期以後の過干渉、それに一貫している父性欠如を日本型親子関係とし、その問題性を指摘した。稲村¹⁴⁾によると、欧米では幼児期には親が極めて厳しく、思春期以後は放任に近くなるという点において大きな違いがあるという。齋藤⁸⁾は、日本人が子どもをかわいがることについて、幕末から明治期の外国人がおどろきを示した歴史的記述について紹介している。このように従来、日本人の親子関係は、甘えを許容される母子関係を基軸に展開し、父性欠如の状況下でその問題性が発露するものとみなされてきた。

2-2. 個と集団との関係性にみられる普遍的な文化差

今や時代は大きく変わり、「イエ」概念に縛られる人は減り、個が重視され、価値観はグローバル化している。子育てはファッション化し、若い世代においては「イクメン」と言う言葉によって、父の育児参加は当然とみなされる時代になった。

しかし、Benedict, R.³⁾・中根²¹⁾・土居⁷⁾が描いた伝統的な日本人の文化的特徴の本質は、いまでも生きている。図1および以下の記述は、日本で育った筆者の臨床経験、半年間の米国生活、後述する米国人家族との対面調査による実感に基づく日米の文化差を図式化及び言語化したものである。図1では、個人の自我境界の度合を線の太さで表し、相互作用を矢印で表現することにより、個と集団の関係性の在り方の差異を視覚化した。これらは、近年の文化差に関する研究^{1) 18) 37) 38)}とも、ほぼ一致する認識である。

多民族社会で個人主義が徹底されている米国では、差異があっても当たり前の社会に適應するために個が確立される。他人と自分の境界は明確であり、その境界は集団によって影響をうけず、言語的に主張することが、社会で生きていく上で重要なことと認識されている。ゆえに対話における誤解の責任は「話し手」にあるという前提の上に関係性が成立している。そのため、米国の子どもは、自己の感情や意見を主張する力を身につけることが重視される。

それに対して、日本は単一社会であり、みんなが同じであることを前提に、自己は関係性の中で確立される。個の境界は、集団の性質によって規定され、我々は常に

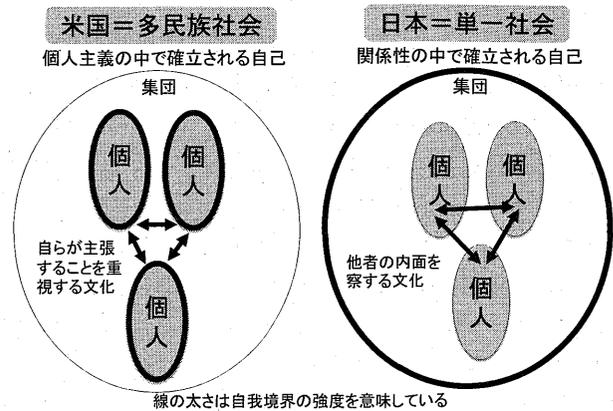


図1 集団と個の関係性における文化差

相手の状態を察し、無意識に汲み取っている。それゆえ日本においては、対話における誤解の責任は「聞き手」にあるという前提の上に関係性が成立している。そのため日本の子どもは、相手の感情を汲み取る力(思いやり)を身につけることが重視される。我々は常に関係性の中で、自らの自我境界の厚みを調整し、当然察してくれるという期待(筆者はこれを「甘え⁷⁾と捉えた)の度合を、関係性の中から判断する。個が集団によって規定される社会においては、その時々におけるタテの関係性²¹⁾を意識化することによって、自我境界は強固なものになると言える。

英語の語順では、主語の次に助動詞・動詞がくる。どのような助動詞・動詞を選択するのかということは、自己の意思であり、周囲との関係性に影響を受けない。このような言語の特性は、個の在り方の反映でもあるが、日本語は、しばしば主語を省略し、助動詞・動詞は最後である。我々は話をしている間に、相手の様子を観察し、相手の気持ちを汲み取り、最終的にそこでの関係性に適合する助動詞を用いることで動詞の意味を調整する。それが「和」を重んじる姿勢となる。このような日本語の在り様は、われわれの自己が常に関係性の中で規定されていることの反映でもある。

Benedict, R.³⁾は、礼儀にかなった振る舞いをするために、たえず階級や性別や年齢や過去の交際ぶりなどを識別しなければならない関係性は「一種の芸当」だと述べている。現在においても、日本人は「思いやり」をもつために「観察する自己³⁾」を獲得することが重視されており、「空気を読めない」青年は集団適応が困難になり、多くの青年たちが他者評価に縛られている⁴⁰⁾。

欧米では乳児を「あかちゃん部屋」で寝かせるが、日本では両親と同室で寝かせる。この文化は、現在においても変わらない。それは出産した母の身体的・無意識的な感覚に基づいているものであると思われる。自我境界

の在り様と親子の距離は、民族特有の遺伝子と歴史の影響下で育まれてきた子育て文化の中で、相互作用しているものと考えらるべきだろう。親子・夫婦・家族の関係性も、図1の文化型のもとに成立している。相手の感情を汲み取る文化にある日本においては、おのずと母子の関係における自我境界はきわめてあいまいなものとなる。母は自分の感情と子の感情を区別せずに表現し、高い共感性のもとに子を保護する母と子の共生関係を中心に構成される日本の家族関係と社会の在り方を、河合¹⁶⁾は「母性社会」、稲村¹⁴⁾は「日本型親子関係」と呼び、母の子どもに対する強い密着が日本的な精神病理構造に影響を与えていることに警鐘をならしてきた。しかし、注意しなければならないのは、文化の型そのものに是非はないということである。それぞれの型の中に、健全なあり方と病理的なあり方が存在する。米国は精神科医療大国であり¹⁷⁾、米国には米国の課題があり、日本には日本の課題がある。欧米の基準や方法論をそのまま日本に当てはめること、アメリカ精神医学会の診断基準であるDSMを無条件にそのまま利用することが妥当なのかどうかを判断するために、文化差を意識化することは重要である。

3. 調査研究

3-1. 調査の目的

母の子どもに対する負情動・身体感覚否定に関して、日米にどんな差異があるのかを探索すること。

3-2. 調査対象者(表1)及び調査時期と方法

公園で遊んでいる就学前の幼児の母に声をかけて、調査の同意が得られた方に、個別に対面で調査用紙に記入を求めた。調査対象者の属性及び人数は表1に示した。ほぼ同様の属性をもっているといえる^{注)}。

日本：昭和記念公園(東京都立川市)2012年5月実施。
米国：セントラルパーク(ニューヨーク)2012年4月実施。

表1 調査対象者の属性

国別	人数	母の年齢		子の人数		子の年齢別の親の人数	
		平均	幅	平均	幅	0-3歳の子をもつ親	3歳以下の親
日本	71	34.08歳	25~45歳	1.83人	1~5人	56人	15人
米国	61	36.59歳	29~49歳	1.59人	1~4人	53人	8人

3-3. 調査内容

①質的研究

子どもがころんで泣いているときに、子どもをなだめるために「痛くないよ」と言うかどうかに対して、はい・いいえで回答を求めた。さらに、実際にどのような言葉でなだめるか、自由記述を求めた。

②量的研究

以下の2種の質問紙に回答をもとめた。

・子育て不安否定認識質問紙³³⁾: 子育て不安を抱えてい

表2 子育て不安否定認識質問紙の項目

1	はっきり言って、子育てに悩み、くよくよする自分はきらいだ。
2	子育てのことでわからないことがあると、なんだか怖くなる。
3	子育て不安を感じることはいけないことだと思う。
4	子育てや子どものことについて不安になる自分を許したくない。
5	子育て方法やしつけについて困ったとき、なんだか逃げ出したい気持ちになる。
6	子育てが上手にできない自分はいけないと思う。
7	子育てについて不安を感じることは避けたいと思う。
8	子育てに悩み、くよくよしているとき、もっと頑張らなければいけないと思う。

表3 子の負情動表出制御態度質問紙の項目

1	子どもには、泣くことが良くないことだとわかってほしい。
2	子どもが言うことを聞かないで泣いているときは、それをすぐ止めなければと思う。
3	子どもには、泣かずに、ちゃんと考えて行動してほしい。
4	子どもが泣いたとき、二度とそういうことが起こらないように対処しようと思う。
5	子どもが泣かずに、ニコニコと楽しくしてさえいれば、結果的に親子は仲良くなれると思う。
6	子どもには、ぐずることが良くないことだとわかってほしい。
7	子どもが言うことを聞かないで、ぐずるときは、それをすぐ止めなければと思う。
8	子どもには、ぐずらずに、ちゃんと考えて行動してほしい。
9	子どもがぐずったとき、二度とそういうことが起こらないように対処しようと思う。
10	子どもがぐずらずに、ニコニコと楽しくしてさえいれば、結果的に親子は仲良くなれると思う。
11	子どもには、かんしゃくを起こすことが良くないことだとわかってほしい。
12	子どもが言うことを聞かないで、かんしゃくを起こしたときは、それをすぐ止めなければと思う。
13	子どもには、かんしゃくを起こさず、ちゃんと考えて行動してほしい。
14	子どもがかんしゃくを起こしたとき、二度とそういうことが起こらないように対処しようと思う。
15	子どもがかんしゃくを起こさずに、ニコニコと楽しくしてさえいれば、結果的に親子は仲良くなれると思う。

る自分を不快に感じる度合を尋ねる8項目(表2)。

・子の負情動表出制御態度質問紙³³⁾:泣く・ぐずる・かんしゃくの場面において、それを制御する親の態度に関する15項目(表3)。

いずれも「全く思わない」「あまり思わない」「どちらかというと思う」「非常に思う」の4件法で回答。米国版の作成にあたっては、英訳したものをネイティブの英語教師にチェックしてもらい、一般の人が読んでわかる英語表記であることを確認した。

これらの質問紙は、尾上³³⁾において因子妥当性(1因子構造)と信頼性が確認されており、子育て不安否定認識が高いと子の負情動表出制御態度も高いという結果が明らかになっている。

3-4. 質的研究の結果

①「(あなたは) 痛くない」というなだめ方

日本においては、子どもが痛い思いをしているときに、「痛くない」という身体感覚を否定する形の言い回しによって、子どもをなだめようとするのがよくみかけられる。筆者は、このようなコミュニケーションが、感情制御の脳機能を育てるために不適切であることをこれまで述べてきた^{24) 26) 28)}。そこで「子どもがころんで泣いているときに、お子さんをなだめるために、次のようにと言いますか?『痛くないよ』』という質問に対して、はい/いいえで回答を求めた。英語版では次のように尋ねた。Do you say the following to soothe your child (ren) when they fall down and are crying? "You don't feel pain".

日本では、はいと答えた母は22名、いいえと答えた母は49名で、はいと答えた母は31%であった。米国では、Yesと答えた母は9名、Noと答えた母は52名で、Yesと答えた母は15%であった。この質問は、その前後の文脈などの情報を省いているきわめてシンプルな問いとして投げかけているものだが、それに対して迷いなく「はい/Yes」と答えた人の割合がこの結果を示しており、この差は統計的に有意であった($\chi^2(1, N=31)=5.452, p<.05$)。このように身体感覚を否定する形でなだめる言い回しを使う人は、日本のほうが、米国の約2倍であることが示された。

②母が子をなだめる表現の収集

親が子をなだめる表現方法に、日米差があるのかどうかを探索的に調べた。上記のはい/いいえ質問に続いて、「お子さんが泣いているときに、お子さんをなだめるために何と言いますか?」という質問に対して、自由記述を求めた。

自由記述に記載された回答を、1つの内容(メッセージ)ごとに分割し、同様の意味を示すものごとに分類し

表4 子がころんだ際の母の声かけの回答割合

回答種別	日本		米国	
	回答数	割合	回答数	割合
大丈夫メッセージ	22	47.8	24	52.2
身体接触*	3	17.6	14	82.4
ママの存在感**	1	8.3	11	91.7
未来形メッセージ*	6	25.0	18	75.0
痛みへの共感*	18	75.0	6	25.0
ほめメッセージ*	10	90.9	1	9.1
状況質問	21	63.6	12	36.4
拒絶	7	70.0	3	30.0
理由質問	3	33.3	6	66.7
注意喚起	2	100.0	0	0.0
代弁行為	1	100.0	0	0.0
泣くことの肯定	1	20.0	4	80.0
気そらし	5	41.7	7	58.3
Loveメッセージ	1	33.3	2	66.7
はげまし	1	50.0	1	50.0
欲求確認質問*	0	0.0	4	100.0
説明要求	0	0.0	1	100.0
現実直視	0	0.0	1	100.0
深呼吸	0	0.0	1	100.0
計	102		116	

た。分類項目ごとの個数および割合を表4に示した。各分類項目の回答サンプルを表5に示した。記載されたメッセージ(行為)の数は、日本102個、米国116個で統計的に差はなかった($\chi^2(1, N=218)=0.899, n. s$)。分類名の補足説明は表5に記載した。

同分類の日米出現割合に差があるといえるかどうかを確認するために χ^2 検定を行った(表4)。米国の方が日本よりも有意に多かった回答は、身体接触($\chi^2(1, N=17)=5.882, p<.05$)、ママの存在感($\chi^2(1, N=12)=6.750, p<.01$)、未来形メッセージ($\chi^2(1, N=24)=5.042, p<.05$)、欲求確認質問($\chi^2(1, N=4)=4.250, p<.05$)であった。日本の方が米国よりも有意に多かった回答は、痛みへの共感($\chi^2(1, N=24)=5.042, p<.05$)、ほめメッセージ($\chi^2(1, N=11)=5.818, p<.05$)であった。

「大丈夫メッセージ」は、日米ともに共通して最も多かった。英語では、You are OK. It is OK.という両方の表現があり、子の痛みに対して大丈夫だという場合と、状況が深刻ではなく大丈夫だという両方の場合があった。日本語では主語が用いられないが「大丈夫」には、子を指す場合と状況をさす場合の両方が含まれるという点においては共通していた。

米国の母が有意に多く回答した「身体接触」は、子どもがころんで泣いたときに、抱いたりキスしたりする行為をまとめたものであり、「ママの存在感」とは、母が自分の存在によって子をなだめることができること伝えるメッセージである。これらは、愛着行動の基本といえる。また、米国の母は、「未来形メッセージ」で子どもをなだ

表5 子がころんだ際の母の声かけの表現サンプル

	米国	日本
大丈夫メッセージ (ニュアンスによって肯定にも否定にもなる)	You'er okay. It's OK./I know it's okay./This is OK. They are safe,	大丈夫 (肯定) / 大丈夫だよ、と安心させる 大丈夫!! / でももうだいじょうぶ!! 大丈夫。大丈夫。
身体接触 (抱いたり、キスしたりすることで、子どもを安心させる)	I Kiss him where it hurt I give a hug and kiss./Hoo, Kiss. Do you need a cuddle(hug)? /Let's cuddle. Let me kiss you and make it better. Can mama kiss it and make it better? I always lift the baby up to hug and kiss him.	痛かったところをさすって落ち着くまで抱きしめる 抱っこして大丈夫だよ かけ寄ってきたのをそのまま抱きしめる。
ママの存在感 (母が自分の存在によって子どもに安心を与えることができると伝える)	I'm here for her./Come to mama. Be loving mother and caring mother We are here, come here./I am here to help. I am going to make you feel better. Tell mommy whether it hurts we'll make it better. Mummy is here Shhhhh, tell me/mommy what happened?	お母さんがいるから大丈夫
未来形メッセージ (未来形を用いることで、今は痛いことを承認しているが、のちによくなることを伝えるメッセージ)	Everything is going to be OK. It will stop hurting soon./It is going to be OK. you will be fine./You will feel better soon. You will be alright(=all right). That the situation will get better I hope she'll get better./They will be Ok.	なでなでしてるとすぐに痛なくなるよ 痛い痛いのとんでいけ!!
痛みへの共感	I know that it hurt./I know she is scared. I sympathize and try to be understanding that they are hurt. I understand you are upset. I'm sorry they hurt themselves.	「痛かったね〜。」と共感 悲しいねー! 痛いねー。 痛かったね、びっくりしたね
ほめメッセージ (母が子をほめることで泣き止ませようとする)	You are a big girl.	頑張ったね / がんばった / よくがんばったねー いい子いい子。がんばれー! また、1こ強くなったよー / 強い! 強い! でも〜でえらいね
状況質問 (大丈夫かどうか確認する)	Did you hurt yourself? Dose it hurt? / Are you OK?	どうしたの? / 何があったの? どこが痛い? / 大丈夫?
拒絶 (子が泣いていることを明確に拒絶もしくは無視する)	Don't cry! Please stop otherwise I won't understand why you are crying. Pacifier (おしゃぶり)	とくに声かけはしない。 「女はないちゃダメだ」「男は泣くな」結果「立ち上がれ」 もうお姉さんだから泣かないよ。 一緒に遊ぼうね。泣かないよ。 泣いたら耳が痛くなるから泣かないで もう泣かないよ。 / 泣くな!
理由質問 (泣いている理由をたずねる)	Why are you crying? Why? Why are you sad?	何で泣いてるの? 何が嫌なの?
注意喚起		気をつけようね。
代弁行為		泣いている理由をかわりに言う
泣くことの肯定	It's OK to cry. I pick them up and hold them and let them cry for a few minutes. It is ok to cry, pain will go.	痛ければ思いっきり泣いていいよ。
気そらし (他のことに気をむけることによって、なだめようとする)	Shake it off, you're OK. Okay, shake it off. I make them feel better by saying something funny. Think of something positive.	パンパンしようか! とほろわせて気をまぎらわせる。 ほらいくよー 先に行っちゃうよー みんなまってるよー 気を全く違う方に向けてるように言葉がける。 気をそらすことを言う
Loveメッセージ	I give you love. Mama loves you!	〇〇ちゃん、愛してるよ〜♡
はげまし	I encourage them to continue playing.	〇〇ちゃんおりこうさんでしょ?
欲求確認質問 (子がしてほしいことを言語的に尋ねる)	What can I do to make it better? Do you want to tell me what's bothering you? I ask them what would help., do they need a hug?	
説明要求	I ask her to use her words to explain what hurts or why she is if upset.	
現実直視	You fell. Ug oh. That can happen. (I stay very calm.)	
深呼吸	Take a few deep breaths.	

めることも特徴的であった。未来形で「You will be fine」と言うことは、今はfineではないということ承認されていることを意味している。日本の場合には「痛い痛いのとんでけー」などがこれにあたるが、きわめて少なかった。「欲求確認質問」は、数は少なかったが有意差があった。これは、子どもにどうしてほしいのかを言語的に尋ねる質問であり、自己主張を重視する米国文化の反映と考えられた。

一方、日本の母が有意に多く回答したのは「痛みへの共感」と「ほめメッセージ」であった。「痛みへの共感」は、子どもの感情を汲み取る日本文化の反映と考えられた。泣かないことをがんばったとほめるなだめ方は、著しく日本に偏った回答であり、特徴的な差異が浮き彫りになった。

3-5. 量的研究の結果

①子育て不安否定認識と子の負情動表出制御態度との関係 (表6)

子育て不安否定認識質問紙の平均値を基準として、高群と低群に分け、子の負情動制御態度質問紙の平均値をT検定した。日本も米国もともに、子育て不安否定認識高群の負情動表出制御態度質問紙の平均値が有意に高かった。つまり、日本も米国も、母自身の子育て不安を否定する傾向が強いと、子どもの負情動を制御する傾向が強いということである。この結果は、尾上³³⁾の結果と一致している。

②各尺度の平均値の日米比較 (表7)

子育て不安否定認識質問紙と子の負情動表出制御態度質問紙の国別の平均値をT検定した。両質問紙ともに、米国の方が日本よりも有意に平均値が高かった。つまり、米国の方が、母自身が自分の子育て不安を否定する傾向も、子の負情動表出を制御する傾向も強いということである。

③子どもの人数別の比較 (表8)

子どもが1人の母と2人以上の母との平均値を、国別にT検定した。子育て不安否定認識質問紙においては、日本・米国ともに、子どもの人数による差異はなかった。子の負情動表出制御態度質問紙においては、日本では、子どもが1人の母は、2人以上の母よりも有意に高かった。米国では、差異がなかった。つまり、日本の複数の子どもを育てている母は、一人っ子の母よりも、子の負情動表出を制御する傾向が弱いということである。

4. 考察

質的研究においては、日本より米国のほうが温かい母子関係が示され、量的研究においてはその反対の結果が示された。この結果には、文化差と現在抱える日本の問題との両方が混在して反映されたと思われる。図1に示した日米の文化差の観点から、今回の探索的な調査の結果が意味することを考察する。

表6 子の負情動制御態度得点の平均値の差の検定

子育て不安否定認識		N	平均値	標準偏差	t検定の結果
日本	高群	35	36.31	6.106	t(69)=5.329, p<0.01
	低群	36	28.28	6.584	
米国	高群	31	39.26	5.066	t(59)=2.116, p<0.05
	低群	30	36.43	5.361	

表7 各質問紙の国別平均値の差の検定

		N	平均値	標準偏差	t検定の結果
子育て不安否定認識質問紙	米国	61	18.38	2.876	t(130)=3.848, p<0.01
	日本	71	16.23	3.546	
子の負情動表出制御態度質問紙	米国	61	37.87	5.362	t(130)=5.011, p<0.01
	日本	71	32.24	7.494	

表8 子どもの数別の各質問紙の平均値の差の検定

質問紙	国別	子どもの数	N	平均値	標準偏差	t検定の結果
子育て不安否定認識質問紙	日本	1人	23	16.83	3.214	t(69)=0.988, n.s.
		2人以上	48	15.94	3.692	
	米国	1人	29	18.66	2.636	t(59)=0.716, n.s.
		2人以上	32	18.13	3.098	
子の負情動表出制御態度質問紙	日本	1人	23	34.83	6.880	t(69)=2.059, p<0.05
		2人以上	48	31.00	7.526	
	米国	1人	29	37.83	5.638	t(59)=-0.057, n.s.
		2人以上	32	37.91	5.189	

4-1. 質的研究の考察

自由記述の結果において、特に注目すべき点は、米国の母に比べて日本の母は「身体接触」と「ママの存在感」で子どもをなだめるという記述が、著しく少なく、ほめることで子の負情動を制御するという点である。米国人においては、泣いているときに褒めるという回答は1例(0.9%)のみであった。

子どもがころんで泣いているときに、抱いたり、ママという存在によってなだめるという姿勢は、母子の健全な愛着システムを示していると言える。子どもの泣きを

キャッチした母が、情動調律により、子どもをなだめる行為を行う姿である^{27) 36)}。この関係性を構築できないことは、図1に示した文化型の両方において、生じることでありと考えられる。

日本人に特徴的であった「泣いているときにほめることでなだめる」という方略は、泣くことをよしとしないという前提を含んでおり、泣き続ければ「よい子」ではないということを暗に伝えるダブルメッセージとなる。自我境界が明確な個人主義型親子関係においては、子どもの泣き(=不快)は子どもに属するものであり、親自身の感情とは境界がある。自我境界があいまいな共生関係にある日本型親子関係においては、子どもの泣き(=不快)は母自身の不快となりやすい。それは共感性の高さをも意味しており、受容されれば一体感による安心感が高まるのだが、受容が困難な場合、母は一刻も早く自らの不快をなくすための方略を求めることになる。その結果、泣かないことを子どもに求めることが必要になる。図1の矢印の差異が、この結果に反映されている。米国の母は、子どもが泣いているときに、なだめるために子どもの自我境界の中に入り込まないが、日本の母は、子どもの自我境界の中に入り込んでなだめようとするのである。その結果、「泣いているときにほめる」というあり方は、典型的に、Bateson, G²⁾が指摘したダブルバインドのコミュニケーションとなる^{24) 26) 31)}。ほめるという肯定的なメッセージによって受容のコンテクストを作りながら、身体の痛みや不快というコンテンツを否定しているメッセージである。

子どもがころんで泣いたときに「痛くない」という言葉によって、子どもをなだめる傾向は、日本人のほうが米国人の2倍であった。自由記述の結果からは、日本の母は、子どもの「痛みへの共感」が有意に強かった。母たちは子の痛みがわかるからこそ、否定するのである。

筆者はこれまで、たとえば「痛くない」という形で親が子の負情動・身体感覚を否定することが、子どもの解離様式による適応をうながし、感情制御の発達不全をもたらしていくことを主張してきたが^{24) 25) 26) 27)}、親が子の負情動・身体感覚を否定する形としては、「痛くない」という直接的な否定に加えて、「ほめ」による制御が大きな役割を果たしていることが、この質的研究を通して示唆された。東¹⁾は、しつけと教育に関する日米比較研究をまとめた著書の中で「『うち』と『そと』を分化して認識させ、自分はいい子だという意識のもとでそれぞれの場にふさわしい役割行動を見つけるように方向づけるしつけが、自発的役割人間が育つための生態学的適所をなしている」と述べている。この記述は、本研究の結果を的確に説明する。「ほめ」によって、自己の負情動・身

体感覚を制御させられた子どもは、親に愛されるために「親の前でよい子」になり、その反動で学校でできる状態に陥るのである。

この質的研究は、自由記述の回答数の個数の差異に基づく探索的な研究であったが、結果は、感情制御の発達不全モデルの妥当性を担保するものであり、親の前と学校とで、まったく異なる感情制御の状態を示す子どもの状態像が、日本特有の親子関係の反映であることを示す可能性が明らかになった。

米国のデータからも、数は少ないながらも「痛くない」と言う回答した人、「泣いているときにほめる」回答が存在した。もともと自我境界が明確な個人主義に基づく関係性が展開されている環境において、このようなコミュニケーションが行われた場合、ゆがみはさらに大きなものになるのかもしれない。Linehan, M. M.¹⁹⁾は「不認証環境」を境界性人格障害(BPD)の背景として提示しているが、図1に示した文化差は個の感情を処理する上でのコンテクストとして機能している可能性がある。自我境界があいまいな共生関係にある日本型親子関係というコンテクストにおいては、負情動・身体感覚否定は、幼児期の一次解離反応を促進すると考えるのが妥当だろう。

4-2. 量的研究の考察

質問紙調査の結果から、子育て不安否定認識も個の負情動表出制御態度とともに、日本人よりも米国人のほうが有意に高いことが示された。これは図1に示した個人主義に基づく親子関係を反映した結果であろうと思われる。子どもを独立した個として認識する欧米においては、親子関係は権威的であり日本よりも子どもに厳しいといわれてきたが^{1) 14) 38)}、そのような文化差の表れとみるのが妥当だと思われる。前述したように、質的研究においては、米国のデータのほうに健全な愛着を示す記述が多くみられていた。それぞれの文化の型の中に、健全なあり方とそうではないあり方があると考えられ、文化が異なる以上、質問紙による比較にそれ以上の意味を見出すことはできない。

しかしながら、日米それぞれのデータにおいては、ともに、母自身の子育て不安を否定する傾向が強いと、子どもの負情動を制御する傾向が強いということは、共通していた。この結果は、自身の負情動を否定する傾向が子育てに反映されるという世代間伝達の可能性を示唆しており、文化差に影響されない現象であることが示されたといえる。そして、子育て不安否定認識は、日米ともに、子どもの人数によって影響をうけないことも明らかになった。しかしながら、負情動表出制御態度に関しては、日本人は、複数の子どもを持つことで子育て経験を

重ねるとおおらかになるが、米国人は影響を受けないということが明らかになった。この結果は、我々日本人の日常体験と一致した結果であり、図1に示したように、日本人が関係性の中で個を確立することを示した結果であるといえる。

このように、質問紙調査の結果は、文化差を明確に反映する結果であった。

5. まとめ

子の負情動・身体感覚否定に関する日米比較を行ったところ、日本文化の特徴を反映する形で、ほめによる否定というダブルバインドの形が特徴的であることが明らかになった。その結果、「親の前でよい子/保育園・学校でできる子」という問題が日本において特徴的に生じている可能性が示唆された。今回の探索的な日米比較調査でえられた結果に基づき、現在の日本の母たちが、母としての自信とそれにもとづく抱く行為によって子どもをなだめることができないのはなぜか、実際どのくらいの割合でそれが生じているのか、負情動・身体感覚否定の実態を、実証的に明らかにすることが、今後の課題である。

筆者はこれまでに、母子の愛着の相互作用を脳機能の観点から図式化し、子の泣きという刺激に対して母の辺縁系に不快が喚起される時、情動調律が困難になり、母自身の不快を解決するための行動が選択される時に、子の負情動・身体感覚の否定が生じるということを述べてきた²⁷⁾。本研究により、子の泣きやぐずりによって母の辺縁系に不快が喚起されるという点は、世界共通であるが、その不快をなくすためにどのような行動をとるかという点においては、文化の影響を受けるのではないかということが見えてきた。

文化の影響を考慮するということは、発達途上にある子どもたちの心理的問題の見立てや、愛着に関わる親支援の方法論に関する輸入概念や技法を適応する際にきわめて重要なことである。安易に欧米をまねるのではなく、日本の親子の特性を尊重した上での活用、そして、共感性の高い母性社会の長所を生かす支援を模索することが重要である。

注)：米国は社会階層による差異が大きい社会である。本調査の対象者は、休日セントラルパークで家族で過ごし、外国人である筆者の求めに快く応じてくれた中流層以上のデータであり、米国人全体を代表するデータではない。

付記：調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

ます。日本における調査の実施は、東京学芸大学大学院教育学研究科学校心理専攻大河原研究室の大学院生とともに行った。

引用文献

- 1) 東洋：日本人のしつけと教育 発達の日米比較にもとづいて、東京大学出版会、1994.
- 2) Bateson, G., Don D. Jackson, Jay Haley & John H. Weakland: Toward a theory of schizophrenia, 1956. In Bateson, G.: Steps to an Ecology of mind. 201-227, Ballantine Books; New York, 1972. 佐藤良明訳：精神の生態学, 288-319, 思索社, 1990.
- 3) Benedict, Ruth: The Chrysanthemum and the Sword. Mariner Books, 1946 (2005). 角田安正訳：菊と刀, 光文社, 2008
- 4) Berlin, L. J., & Cassidy, J.: Mothers' Self-reported Control of Their Preschool Children's Emotional Expressiveness: A Longitudinal Study of Associations with Infant-Mother Attachment and Children's Emotion Regulation. *Social Development*, 12 (4), 477-495, 2003.
- 5) Cole, P. M., Hall, S. E. & Radzich, A. M.: Emotional Dysregulation and the Development of Serious Misconduct. (Biopsychosocial Regulatory Processes in the Development of Childhood Behavioral Problem.: Olson, S. L & Sameroff, A. J. (Ed.), 186-211, New York, Cambridge University Press, 2009.)
- 6) Davidov, M., & Grusec, J. E.: Untangling the Links of Parental Responsiveness to Distress and Warmth to Child Outcomes. *Child Development*, 77 (1), 44-58, 2006.
- 7) 土居健郎：「甘え」の構造. 弘文堂, 1971. (2007増補普及版)
- 8) 土居健郎・齋藤孝：「甘え」と日本人. 角川書店, 2010.
- 9) Eisenberg, N., & Fabes, R. A.: Mothers' Reactions to Children's Negative Emotions: Relations to Children's Temperament and Anger Behavior. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40 (1), 138-156, 1994.
- 10) 福泉敦子・大河原美以：母からの負情動・身体感覚否定経験が攻撃性に及ぼす影響—一家庭内暴力傾向との関係—。東京学芸大学紀要総合教育学系 I, 第64集, 印刷中, 2013.
- 11) Gomez, A. M.: Healing the Caregiving System: Working with Parents within a Comprehensive EMDR Treatment. *Journal of EMDR Practice and Research*, 6 (3), 136-144, 2012.

- 12) Haslam, M., Mountford, V., Meyer, C. & Waller, G.: Invalidating Childhood Environment in Anorexia and Bulimia Nervosa. *Eating Behaviors*, 9 (3), 313-318, 2008.
- 13) 猪飼さやか・大河原美以：母からの負情動・身体感覚否定経験が自傷行為に及ぼす影響 — 解離性体験尺度DES IIとの関係 —. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第64集, 印刷中, 2013.
- 14) 稲村博：家庭内暴力 日本型親子関係の病理. 新曜社, 1980.
- 15) Katz, L. F., & Windecker-Nelson, B.: Parental Meta-Emotion Philosophy in Families With Conduct-Problem Children: Links With Peer Relations. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 32 (4), 385-398, 2004.
- 16) 河合隼雄：母性社会日本の病理. 中公叢書, 1976.
- 17) 川西結子：うつ病治療と現代アメリカ社会 日本は何を学べるか. 海鳴社, 2012.
- 18) 北山忍：自己と感情 文化心理学による問いかけ認知科学モノグラフ 9,
- 19) Linehan, M. M.: *Cognitive-Behavioral Treatment of Borderline Personality Disorder*. The Guilford Press, 1993. マーシャル・M・リネハン著 大野裕監訳 境界性パーソナリティ障害の弁証法的行動療法 DBTによるBPDの治療. 誠信書房, 2007.
- 20) Martin, J., Bureau, J. F., Cloutier, P. & Lafontaine, M. F.: A Comparison of Invalidating Family Environment Characteristics between University Students Engaging in Self-Injurious Thoughts & Actions and Non-Self-Injuring University Students. *Journal of Youth and Adolescence*, 40 (11), 1477-1488, 2011.
- 21) 中根千枝：タテ社会の人間関係 単一社会の理論, 講談社, 1967.
- 22) 大河原美以：怒りをコントロールできない子の理解と援助：教師と親の関わり, 金子書房, 2004a.
- 23) 大河原美以：親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響 — 「よい子がきれる」現象に関する試論 —, *カウンセリング研究*, 37, 180-190, 2004b.
- 24) 大河原美以：子どもの心理治療にEMDRを利用することの意味 — 感情制御の発達不全と親子のコミュニケーション —, *こころの臨床アラカルト*, 27 (2), 293-298, 星和書店, 2008.
- 25) 大河原美以：子どもの「感情制御の発達不全」と治療援助の方法論. 平成21年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士学位論文, 2010a.
- 26) 大河原美以：教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (1) — 「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性 —. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第61集, 121-135, 2010b.
- 27) 大河原美以：教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (2) — 感情制御の発達と母子の愛着システム不全 —. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 215-229, 2011.
- 28) 大河原美以：将来心配な「よい子」と過剰適応. *教育と医学*, 2012年7月号, 4-10, 慶應大学出版会, 2012.
- 29) 大河原美以：衝動的で感情コントロールが難しい子. *月刊学校教育相談*, 2012年10月号, 10-17, ほんの森出版, 2012.
- 30) 大河原美以・猪飼さやか・福泉敦子：母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成 — 因子妥当性と信頼性の検証 —. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第64集, 印刷中, 2013.
- 31) 大河原美以：児童期における解離を促すダブルバインド特性 — 暴力を主訴とした小学生男児の家族援助 —, *家族療法研究*, 29 (3), 278-285, 2012.
- 32) 岡野憲一郎：わが国における解離性同一性障害 — その成因についての一考察 —, *トラウマティックストレス*, 5, 33-42, 2007.
- 33) 尾上明日香：乳幼児の母の子育て困難と負情動否定認識との関係. 東京学芸大学大学院教育学研究科学学校心理専攻修士論文, 2009.
- 34) Rodriguez, M. L., Ayduk, O., Aber, J. L., Mischel, W., Sethi, A., & Shoda, Y.: A Contextual Approach to the Development of Self-regulatory Competencies: The Role of Maternal Unresponsivity and Toddlers' Negative Affect in Stressful Situations. *Social Development*, 14 (1), 136-157, 2005.
- 35) Sturrock, B. A., Francis, A. & Carr, S.: Avoidance of Affect Mediates the Effect of Invalidating Childhood Environments on Borderline Personality Symptomatology in a Non-Clinical Sample. *Clinical Psychologist*, 13 (2), 41-51, 2009.
- 36) 鈴木廣子・大河原美以・殿川佳子・藤岡育恵・響江吏子：母子の愛着システム不全評価尺度の作成 (1) — 2歳児における質的データの分析 —. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 241-255, 2011.
- 37) 高野陽太郎：「集団主義」という錯覚 日本人論の思い違いとその由来, 新曜社, 2008.
- 38) 恒吉僚子：人間形成の日米比較 かくれたカリキュラム, 中公新書, 1992.

- 39) Van der Kolk, B. A: Developmental Trauma Disorder: Towoeds a rational dignosis for children with complex histories. *Psychiatric annals*, 35 (5), 401-408, 2005.
- 40) Zielenziger, M: *Shutting Out The Sun*. The Doubleday Broadway Publishing Group, 2006. 河野純治訳：ひきこもりの国 なぜ日本は「失われた世代」を生んだのか. 光文社, 2007.